特別レポート

学びを社会につなげる「本物のアクティブラーニング型授業」

――神奈川県・桐蔭学園の教育改革

全校挙げて本格的なアクティブラーニング型授業に取り組む神奈川県の桐蔭学園は、教育改革のフロントランナーとして、全国の高校から熱視線を浴び続けている。この一年で何を手掛け、生徒や先生方はどう変化していったのか、レポートした。

進学校としてのＡＬを模索

２時間目の始業を告げるチャイムが鳴り、生徒たちが慌ただしく席に着いた。ここは神奈川県の桐蔭学園。高校１年の数学の授業である。単元は「平面ベクトルの動き」。担当の袴田英康先生（教科主任）が例題を解説後、生徒は６つの課題に取り組む。次に５～６人のグループで指定された問題を解き、発表。話し合いつつ、机上の「まなボード」に次々と解法を書く生徒たち。教室は熱気に溢れていた。

桐蔭学園（中等教育学校・中学校・高等学校。野坂康夫校長）は２０１４年の創立50周年を機に「教育改革プロジェクトチーム」を発足させ、次の50年を見据え、「自ら考え判断し行動できる子どもたちの育成」に向け、「アジェンダ８」を策定した。

（後列左から）岡田直哉先生　川妻篤史先生　佐藤透先生　（前列左から）向山真美先生　関谷吉史先生　賀永麻美先生

一貫教育推進部長・高等学校次長の岡田直哉先生（国語科）は改革の背景に「生徒の変質」を挙げる。「言われたことをするだけ、コミュニケーションも難しい生徒が10数年ほど前から増え、『従来型の指導ではダメになる』という感覚が強まっていました」。桐蔭学園では習熟度別クラス編成を行う。二学期制のため、中間試験、学年末試験の成績でレッスン（クラス）が入れ替わる。以前はレッスンの移動に生徒は一喜一憂したが、それが薄れた。大学進学も「ほどほど志向」だ。

そこで「自ら考え判断し行動できる子どもたちの育成に、一番プラスに作用するもの」として、アジェンダ８の筆頭に挙げられたのが「アクティブラーニング型の授業」だ。

教育改革プロジェクトチームではアクティブラーニング（以下、ＡＬ）の研究を行い、12月に京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一教授に「社会につながる学びとしてのアクティブラーニング」と題して講演を依頼。２０１５年４月には溝上教授を教育顧問として招聘した。「『知識の習得も行った上で、大学や社会につなげるＡＬを』という溝上先生の考えが、進学校である本校の目指す方向に最も合致すると考えたのです」と岡田先生は説明する。

資料①　桐蔭学園の「学力の三要素」

①基礎的な知識・技能
②知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を発表するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力
③これからの時代に社会で生きていくために必要な、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）

＊学校教育法および「高大接続答申」（平成26年12月22日）より作成

ＡＬ推進委員を中核に、進む

ＡＬは⑴（主として活動を学習に組み込んだ）学習形態、⑵（活動と認知から定義される）学習概念、⑶（トランジション・学びと成長パラダイムに基づく）学習論の３つの観点から多層的に理解され、最終的に「学校から仕事・社会へのトランジション・学習と成長パラダイムに基づく学習論」である。桐蔭学園ではさらにＡＬを「学力の三要素（資料①）を踏まえた学習活動」と位置づける。

教務部次長の川妻篤史先生（国語科）らブレストチームは、14年12月以降、ＡＬ関連の記事を23回にわたり、全校の先生に配信し、下地作りをしてきた。

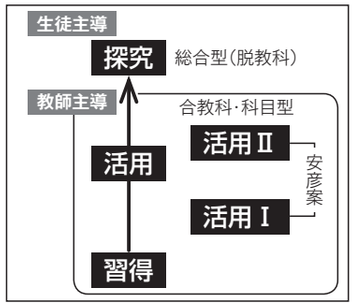
資料②　実施した主な研修会および打ち合わせ会(2015年3月～10月)

Ａチーム(高校)	Ｂチーム(中学)	ＡＬ教科代表	全体・教科
3・27＆28 合宿研修	7・3 定例研修会	7・10 定例打ち合わせ	4・1 高1＆中等4全体
4・18 定例研修会	7・16 定例研修会		4・2 学園全大会
6・13 定例研修会			4・22 中1全体
7・18 定例研修会			4・30 中等1全体
〔夏期、各種校外研修会に参加〕			
9・29 定例研修会	9・1 定例研修会	9・14 定例打ち合わせ	9・5 講演会(国語)
	10・2 定例研修会		9・16 理科会
＊各研修会・打ち合わせの内容を受け、ブレストチームが随時打ち合わせを実施、協議結果・内容をフィードバック			9・29 講演会①
			〃 講演会②

そして高校１年（男子部・女子部）および中等教育学校４年（Ａチーム）、中学１年（男子部・女子部）および中等教育学校１年（Ｂチーム）を「ＡＬ推進学年」と設定、各学年から計30人の先生方による「ＡＬ推進委員会」を設置しＡＬ型授業の開発と普及の核とした。

資料②でＡＬ関連の「研修会」を見ると、立ち上がりの３月27日・28日に、Ａチームに２日間にわたる合宿研修が行われ、溝上教授自ら様々なワークを指導した。ＡＬ推進委員の一人、賀永麻美先生（数学科）は「例えば、１分間の体感時間を知るため、『昨日食べたもの』など日常的な話題を隣の先生と１分間話す練習をしました」と振り返る。

資料③　習得ー活用ー探究の学習プロセス



溝上慎一（アクティブラーニング校内研修資料より）

４月１日の「キックオフ研修」、「全体会」「学年会」「入学式」で、学校全体でのＡＬ推進を表明。特に溝上教授の講演には「保護者や生徒からの拍手が大きく、関心の高さを実感しました」と川妻先生は振り返る。

「活用Ⅱ」というハードル

しかし「最初からプログラムがあったわけではありません。溝上先生の第一声も『走りながら考えましょう』でした」と川妻先生。溝上教授からの最初の課題は「50分授業のうち10分ＡＬを入れる。その10分はペアワークで」。「これならできると実感した教員は多かったのでは」。講義を中心にしたい単元もある。そんな時は「長い目で見てＡＬ型が20％になればいい」と溝上教授。「そういう柔軟性が有難かったですね」（岡田先生）。

生徒らはすぐＡＬ型授業に慣れた。生き生きと語り合う姿に「お互いに変わってきたね」と先生方。ＡＬ推進委員が「発話しやすい教室づくり」にと、「ペアワーク・グループワークの原則」を作成し、教室に掲示した。

これらを溝上教授は「予想を凌駕するハイスピードな取り組み」と捉え、６月には「活用Ⅱでいきましょう」と提案する。

学習プロセスは、知識・技能の「習得」「活用」「探究」の３つの過程から成る。「活用」について、教育学者の安彦忠彦氏は「活用Ⅰ」（授業で習得している基礎的な知識・技能を定着させること）と「活用Ⅱ」（知識・技能を別の角度から深く理解すべく、「実世界（実社会・実生活・自己）に関する事柄を扱う」）を提唱（資料③）。溝上教授はこの説に則ったのである。

「多くの先生方が当初、戸惑いました」と川妻先生は言う。

実社会へのつなげやすさは教科や単元で異なる。特に困ったのは数学。「データの分析や確率などはまだしも、ベクトルや数列は中高生の知識では社会につなげられませんから」と賀永先生。溝上教授に質問メールを送ったところ、「自分たちが持っている知識を問題解決的に活用する展開でどうでしょうか」と

の返信を得た。数学や理科での活用Ⅱは、問題解決という形で『実世界』に迫れるのである。

ALが職員室を変えた

ALの推進力となっているのが「活発な情報共有」である。そのツールの一つが溝上教授も加わるAL推進委員のメーリングリスト。溝上教授も相談に即座に応じてくれ、「安心感が違います」と川妻先生。先生方の膨大なやりとりから6月には2冊の『事例集』も出した。また授業の構想に強い刺激となっているのが、AL推進委員同士の「授業見学」。感想や意見もメーリングリストで共有される。

▲グループで羽生善治名人の特徴を話し合う。（英語）

一方、AL推進委員以外の先生への普及の場の一つが「教科会」。例えば英語科AL推進委員の向山真美先生は、「週一回の教科会で『自分の授業ではこんな実践をしました。生徒の反応はこうです』と紹介しつつ、『何か困っていることは？』などとやりとりします。欠席される先生には日常の会話でのフォローも教科内で心がけています」と語る。またAL推進委員の関谷吉史先生（国語科）は「ALと意識せずとも、ALの大切な部分に通じる授業を実践してこられた先生は少なくありません。『改めて教えていただきたい』と言うと、『自分も古典でパントマイムをやったことがある』。『え!? 先生が？』などと驚く場面もありました」など多様な指導経験の「再発見」もなされている。

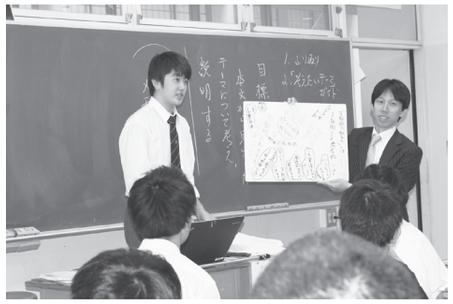
ALに取り組む先生が増えることで、学年や教科を横断する交流も生まれた。「執務室（職員室）で国語科や社会科の先生方と授業について話すようになりました。これは驚きでした」と賀永先生は振り返る。

生徒への視線も変化した。「ALを始めてからは、『●●君は意外とよく手を挙げてくれる』など、ポジティブな話題が増えました」（関谷先生）。

始まった授業改善

再び授業に戻る。桐蔭学園では事前申し込みで、授業を公開している。筆者らは先の数学に続き、高1現代社会（安井健人先生）、高2現代文（関谷先生）、高2英語（向山先生）のAL型授業を見学した。

その中の現代社会。安井先生は「確認テスト10問」（6分）後、「時事理解」と「科学技術の発達の影響―生命倫理の問題」の2つのパートでAL型授業を展開した。プリントとパワーポイントを駆使して授業を展開。例えば「生命工学の発達で生命倫理の問題が生じている」の解説後に、映画『黄泉がえり』『ツナグ』のPRビデオを上映。「これらの映画で若者からお年寄りまでさまざまな世代が涙した理由は何か」「大切なペットや存在が亡くなった場合、技術的にクローンを作り出すことが可能だとしたら、あなたはどのような行動をとるか」について2分ずつで文章にまとめさせた。



▲内田樹のテキストから考えたいテーマをグループで議論し、発表。（国語）

これらを3分のペアワークで共有させたのち、2人が全体発表。「日本人は亡くなった人と再会したいと願う人が多いかも」「相手との思い出を大切にしたいので、クローン技術を使わない」。生徒は神妙に聞いている。最後に安井先生が総括コメントした後、生徒は「ふり返りシート」に記入する。あっという間の50分。緻密に組み立てられ、流れるように進む授業は、まるで「ドラマ」のようだった。

これらAL導入で最も変わったのは、「先生方の授業デザイン」である。例えば関谷先生は「教師には生徒が少しずつステップアップして思考を広げられるところまで、『連れていく』役割がある。授業の組み立てや構造、ワークを入れるタイミングなど、細部まで気を配るようになりました。生徒の発話を『待つ』ことも意識します」と語る。

生徒の授業理解の状況も見えてきた。「ワーク全体を見ることで、生徒がどこでつまづくのか、どう観点を定めてやればいいのかがよく見えるようになりました」と岡田先生は言う。

習熟度が反映される数学はどうか。グループワークを増やした賀永先生は「一番上のクラスでは、答案をスクリーンに映していますが、生徒が互いに違う観点からどんどん自主的に説明してくれています。一番下のクラスはグループワークで『自分も解ける！』と安心感が得られるようです。友人同士で教え合うことで理解も深まり、積極的な姿勢が見られます」と述べた。

また英語の場合、「単元によって講義中心の授業もありますが、ALを導入し続けることで生徒の授業への取り組み方が明らかに主体的になっています」（向山先生）という。資料④で「生徒たちの声」を読むと、こうした様子がうかがえる。

活動をやりっぱなしにしないために重要なのが、先述した「ふり返りシート」。例えば川妻先生は全生徒にコメント。「返答すれば、『もっともっと』と書いてきます」。関谷先生は気になった声のみ、次の授業で紹介する。また賀永先生は「受け入れる」がモットー。韓国語で綴った文を苦心して翻訳したこともある。

この「ふり返りシート」を授業改善や生徒の評価にどう活用するのか、検討を続けている。

＊

急ピッチで進む桐蔭学園のAL型授業。推進学年の先生の約4～5割がALを行うまでになった。学習項目が定められている数学や理科は入れにくい面もあるが、「実験にはいい」との声も聞かれている。

大切なのは「自主性と自律性」。入試広報部長の佐藤透先生は「教員自身が目の前の生徒にいつ、どこでどんなALを入れれば有効なのかを自由に考えることが大事です。やらされるALは避けなければ」と強調する。

「ALによる学業成績への効果」はどうか。関谷先生は「ALの効果だけを析出するのは難しい。表現力や意欲の向上は感じられますが、知識の定着や思考力は変化を見ていかないと」と慎重だ。また川妻先生は「AL型授業での意欲が家庭学習に結びつくには、別の仕掛けが必要では」と、生徒の学びを促す難しさを指摘。そこで今、本格化しているのが、「エビデンスに基づいたALの検証法」の確立である。定期テストに「活用Ⅱ」を反映した出題を盛り込むことや、ルーブリックを用いた評価を導入することなどを検討中だ。

さて今年は、AL推進学年に新たに新高校1年と新中学1年を加え、AL推進委員を60人と倍増させた。昨年の推進委員がミドルリーダーとなり、3月の研修で新AL推進委員にノウハウを伝授。「ミドルリーダーがフォロアーになり、しっかりと支えていくことが大事です」と関谷先生。次々とアイデアを打ち出し実行する様子に、溝上教授も「桐蔭の先生方の自律性は本当に素晴らしい」と絶賛する。

桐蔭学園は今後、AL型授業の深化とともにキャリア教育や探究的な学習とのリンクを試みる。それらの様子は11月12日・13日の「桐蔭学園アクティブラーニング公開研究会２０１６」でも報告されることだろう。

（取材・文／福永文子）

資料④ＡＬ型授業を１年間受けた感想（生徒）

- 一番は毎回楽しくてすぐに時間が経ってしまい、もっと授業していたいと思うような授業でした。
- 授業中に頭をとても使うので、とても充実した時間を過ごせたと思う。
- ＡＬ授業を受けて、自分の意見をもって、周りと意見を言い合うことで、自分とはちがう意見を聞けるので、より先生の答えに納得できるようになった。
- 最初はうさんくさいと思っていたが、文章の読み合わせや他人と意見交換をすることで考え方が気になり、授業を聞こうという意欲がわいてくる。
- 先生の考え方や解答を覚えるのではなく、なぜ自分の考えがないといけないのかなど、様々なことが身についた。こういう授業を続けてほしい。

（桐蔭学園　川妻篤史　「学びと成長を見据えた高大接続・高大連携」＝第22回大学教育研究フォーラム シンポジウム　資料より抜粋）